ふくい歴史かわら版

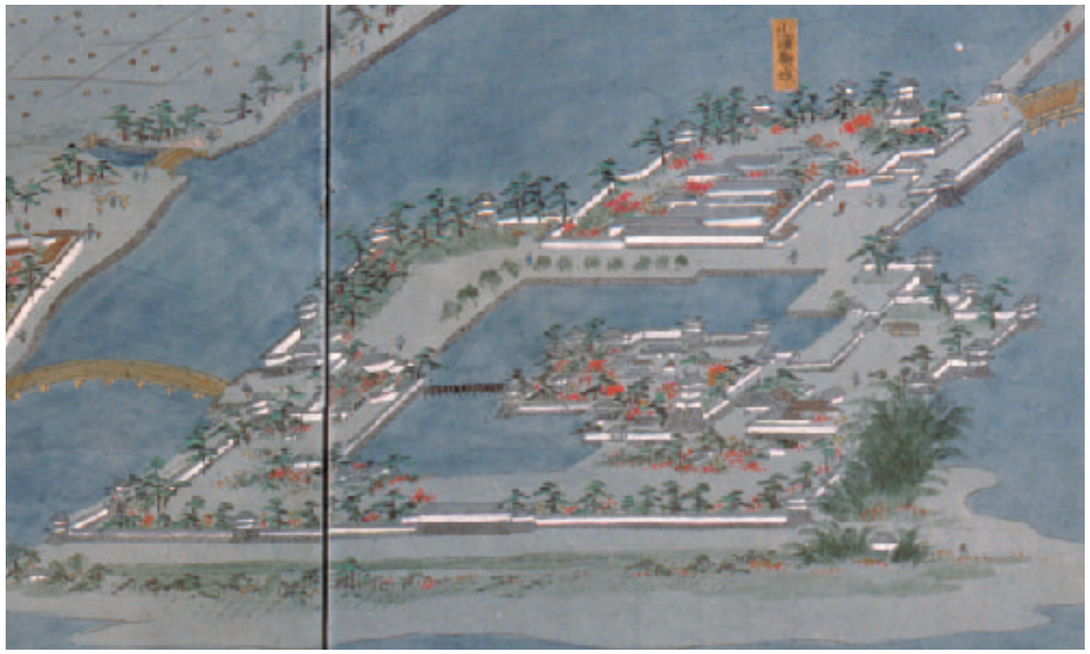
お初の方、京極高次とともに小浜へ！

越前に続き小浜へ まちづくりと浅井家の存続を果たす

浅井三姉妹の二女・初が、夫・京極高次に伴い小浜へ。現・福井県の地を踏むのは、柴田勝家とともに越前（北庄城）で暮らして以来、2度目となる。

（常高寺蔵）

初【常高院】（じょうこういん）
永禄11（1568）年～寛永10（1633）年 ※生誕年は永禄13年の説もあり
浅井長政とお市の方の二女。織田信長、豊臣秀吉に保護され、京極高次の正室となる。大坂冬の陣・夏の陣では、徳川家と豊臣家の和睦に尽力。秀吉の側室・茶々（淀殿）と、2代将軍秀忠の正室・江とは姉妹。



小浜城の屏風絵。高次が着工させ、酒井氏の時代に完成した（田中佳信氏蔵／画像提供：小浜市教育委員会）

浅井三姉妹の二女・初は、父・浅井長政の死後、姉妹とともに織田信長、柴田勝家、豊臣秀吉と身柄を転々とした後の天正15（1587）年に、京極高次に嫁ぐ。初の嫁いだ京極家は、かつて近江の名門であったが、当時は秀吉の一武将という位置づけでしかなかった。それに加え、戦においては、ともに秀吉に滅ぼされた明智光秀、柴田勝家につくなど、一時は存続の危機にまでさらされていた。しかし、初が織田信長の妹・お市の方を母に持つという血縁や、姉の茶々（淀殿）が秀吉の側室だったことなどが京極家を存続させた。

その後、秀吉の九州攻めなどで徐々に頭角を現した高次は、関ヶ原の戦いでは初とともに大津城に立てこもり奮闘。敵軍一万五千を食い止めた功績が認められ、徳川家康に若狭一国八万五千石を与えられた。

小浜に入ると、海路の要衝であった小浜を繁栄させるべく、後瀬山にあった城を廃し、海に面し守りに強い雲浜で小浜城の築城に着手。同時に、新たな城下町づくりにも取りかかると、町割りを行い市場を開設するなど、今日の小浜の町の基礎を築き上げた。

初（常高院）自筆の手紙。周囲の人々への細やかな気遣いが綴られている（常高寺蔵）

また、初は、2代・忠高の時代に、自らの兄妹の中で唯一生き残った男性である弟の喜八郎を引き取ると、出家させ浅井作庵とし、五百石を与えた。その子孫は江戸時代に丸亀藩士となり、初は見事に生家・浅井家の存続を果たしたのである。

なお、初自身も高次の死後に出家し、「常高院」と称している。大坂の役などを経て、晩年を江戸で暮らしたが、高次を弔い、父母である浅井長政とお市の方の供養のため、小浜に「常高寺」を建立した。66歳で没すると、その遺骸は江戸から小浜まで運ばれ、ここで葬儀が行われた。

初（常高院）の遺言に、将来、京極家が国替えされたとしても常高寺は小浜の地に残すようにとの言葉があった。その遺言通り、その後京極家が国替えになっても、常高寺は現在に至るまで小浜の地に残され、彼女の墓もまた、ひっそりと小浜の海を見つめている。

こぼれ話

「ちりとてちん」にも登場した常高寺

現在の常高寺は、山門と石段の間にJR小浜線が走る。この石段は、連続テレビ小説「ちりとてちん」のロケ地としても利用された。

悲運な運命に翻弄された浅井三姉妹

浅井長政とお市の方との間に生まれた3人の娘（茶々、初、江）は、戦国の女性の代名詞として語られることが多い。

お市の方が兄・織田信長の命で浅井長政に嫁ぐが、やがて信長と長政が対立。天正元（1573）年に小谷城が落城すると長政は切腹し、お市の方と三姉妹は織田家に預けられた。

信長の死後、お市の方が織田家の筆頭家老であった柴田勝家と再婚したことを機に越前北庄城に入るが、賤ヶ岳の戦いで羽柴（豊臣）秀吉に敗れると勝家とお市の方は自害。三姉妹は「かたき」である秀吉に預けられることとなる。

その後、茶々（淀殿）は秀吉の側室となり、秀頼の生母として立場を強め、江は2代将軍・徳川秀忠の正室になるなど、それぞれ輝かしい生活を送っていた。

ところが、やがて豊臣家と徳川家が大坂の役で対立すると、姉妹も政権をめぐって争う形になってしまう。その時、京極家へ嫁いでいた二女の初（常高院）が仲介に奔走。大坂冬の陣では見事に和睦を成立させた。これは、男が始めた戦を女性が収束させるという、日本史上でもきわめて珍しい出来事である。

しかし、その後勃発した大坂夏の陣で豊臣家は滅亡し、淀殿は自害してしまう。

このように、幾多の落城や死別、さらには姉妹同士の争いなど、浅井三姉妹は戦国の世に翻弄された、歴史上でも特筆すべき存在だと言える。

なお、この三姉妹を描いた大河ドラマが、平成23年に放送されることが決定している。

伝 淀殿
（奈良県立美術館蔵）

大坂夏の陣図屏風（大阪城天守閣蔵）

江［崇源院］（養源院蔵）

〈参考文献〉
■「戦国三姉妹物語」小和田哲男著　角川書店
■「中世・戦国を生きた女たち」石丸晶子著　清流出版社　ほか